

2010年度 韓国企業見学での体験

外国語学部国際文化交流学科3年 土橋茉生子

引率者 外国語学部 尹亭仁先生・文彰鶴先生
宿泊ホテル サンシャインホテル

(ソウル市江南区新沙洞 587-1)
日付 2010年9月12日(日)～9月17日
(金)「5泊6日」

12日(日)「1日目」

- 11:30 羽田空港第2ターミナル集合
- 13:05 ✈羽田出発 (KAL2708便)
- 15:30 ソウル到着／入国手続き
- 16:30 東和免税店見学
- 18:00 ホテル到着
- 18:30 教保文庫(大型書店)見学
- 19:30 韓国で働いているOB・OGと懇親会
- 22:00 ホテル到着

本日は晴天なり。夏休みの重大イベントが始まるこの日、私は朝から緊張を隠せないでいた。「自分自身が2年半学んできた韓国語の能力を、この企業見学でどの程度発揮できるのだろうか、学校の援助によって韓国へ行くのだからきちんと何かを学んでこなければ。」と、手に汗を握る気持ちで、空港へ向かった。集合場所にいた仲間の表情は思いのほか晴れやかだった。落ち着いた人がいれば、遠足へ行く小学生のような生き生きとした笑顔を振りまいている人もいた。私の緊張も一気に解れた。「何があっても、ここにいる仲間たちがいれば乗り越えられる。」これから待ち受ける出来事に期待と不安を抱きつつ、私たちは金浦空港に降り立った。

一面に数多くの店舗が入り混じり、店員は声を張り上げ、懸命に自己を主張していた。買い物客は我先にとひしめき合っていた。混雑した店舗内を見回し、深呼吸。さあ、ここから本番だ。数日後に見学を予定している化粧品会社MISHAへ行き、韓国語を使って店員と会話をしようと思った矢先、店員の方が流暢な日本語で話しかけてくるではないか。私は一瞬躊躇った。「日本語が通じるなら日本語で話してしまおうか。いや、何のための企業見学なんだ。勇気を出せ。」と自分に言い聞かせて、韓国語での会話を試みた。韓国語で話しかけると、店員の方は笑顔を見せながら、韓国語で接客してくれた。自身の発する韓国語が通じることへの喜びを感じた。化粧品類をいくつか購入し、うきうきしながら店外へ出た。ここで、私自身、た

だの旅行ではなく、学校の授業の一環で韓国へ来ているということを自覚して行動しているのだと感じた。聞こうとする姿勢や積極的に話そうとする姿勢が大事であり、そこから何かを学ぼうとする意志が大切であることを胸に刻み、これからの6日間を過ごしていこうと自分自身と約束した。

次に向かった場所は、国内最大規模の『教保文庫』である。最初に向かった先は、日本語書籍コーナー。日本語書籍がどのように扱われているのかに興味があったのだが、驚くことに、日本のファッション雑誌などの雑誌類は日本語のまま置かれていた。日本の漫画や小説は韓国語訳されたものが、まるで本が「我を読んでみたまえ。」と言わんばかりに、堂々と並べられていた。日本のファッションや漫画が世界で注目をされていることは知っていたが、小説まで需要があるとは知らなかった。日本と韓国の関わりの深さを感じた。また、韓国の小学生の教科書に目を通してみたのだが、低学年の教科書でさえ読むのに一苦労し、他言語の難しさを実感した。書店の雰囲気は日本と大差なく、静かで明るい、居心地のいい場所だった。

書店にて韓国で働いている2人の神奈川大学の卒業生と落ち合い、中華料理屋『三星閣』へ



『金浦空港』にて



MISSHAのパンフレットを手に『東和免税店』の前にて



『教保文庫』で韓国の小学生の教科書を見る2人



『三星閣』にて卒業生と

向かった。日本でもよく知られ、家でもよく食べるジャージャー麺。これが中国北部の家庭料理である酢醬麵から派生した麺料理であることを初めて知った。韓国のものは、日本で食べるジャージャー麺とは違い、濃厚で、麺はもちもちと重くしつかりとしたものだった。これをバレンタインデーやホワイトデーに無縁だった男女が4月14日のブラックデーに食べるというのだから、面白い。ぜひ私も一度、ブラックデーに参加してみたいと感じた。卒業生の韓国での奮闘劇を聞きながら、豪華な夕食にお腹も心も満たされた。そして、気持ちよく、綺麗なホテルへ行った。

13日(月)【2日目】

- 08:30 ホテル出発
- 09:30 KBS見学
- 11:30 昼食
- 14:00 ロッテ製菓見学
- 16:00 大阪屋見学(梨花女子大学前)
- 17:00 韓国語実習①
- 22:00 ホテル到着

2日目、私たちは韓国公共放送局である Korean Broadcasting System、通称『KBS』

へ向かった。大好きなドラマ「フルハウス」を放送した局であったため、心が弾んだ。ビル外にもビル内にも可愛いキャラクターのオブジェが多く飾られ、見学コースの途中には実際の収録風景を眺めることができる場所があるなど、フジテレビとよく似ていた。中には、ニュース番組のセットが用意されており、そこで実際にニュースキャスターのように原稿を読んだり、KBSの放送を3D映像で見たり、さまざまな体験をした。見学の際、そこには案内係りの人がおり、歴代のテレビカメラや撮影機材などの各展示物の説明を韓国語でしてくれた。目を楽しませてくれたKBSの後は、お腹を満たしに韓国料理屋へ。辛いものが苦手な私だが、何故か、口から火が出るかと思うほど辛いユッケジャンを頼んでしまった。これぞ韓国、といった辛さで、私は早々に白旗を上げざるを得なかった。

次は『ロッテ製菓』へ向かった。私たちは、ロッテ製菓にある見学コースへ参加した。もとは小さい子向けの見学コースだったのだが、韓国語を学んでから日が浅い私たちにはちょうど良いのではということ、参加させてもらうことになった。小さい子向けということもあり、可愛く装飾され、見ていて飽きない見学場所だった。ロッテができるまで、ロッテがど

のようにお菓子を製造しているのか、お菓子の種類などの説明を聞いた。小さい子に向けた優しい説明のほすが、三分の一も聞き取れなかった。子どもたちと一緒に参加したクイズは、頭上に「？」を散らしながら、知っている単語が少しでもないかと真剣に聞くことで精一杯だった。私には難解なクイズに、小さな子どもたちが目を輝かせながら答えるので、自分自身の能力のなさに落ち込むとともに、勉強量の足りなさを感じた。ロッテのビル内の壁には「VISION ASIA NO.1 製菓業者跳躍」と堂々と刻まれており、ロッテ製菓の持つ高い信念を感じた。帰国後に、ロッテについてインタビューで調べたのだが、在日韓国人一世の重光武雄氏により1948年に日本に設立されたロッテが、のちに韓国にも進出し、現在では持ち株会社ロッテホールディングスという多くの企業(多国籍)を傘下に持つ大会社となったということを知り、ロッテもまた、日本と密接に関わった企業であることがわかった。

私たちは、梨花女子大学の傍にある『大阪屋』へ行き、たこやきと焼きそばを食べた。日本と変わらぬ味で、とても美味しかった。その後、私たちは、韓国で最初に誕生した女子大であり、女子大としては世界最大規模を誇る梨花女



『KBS』前にて



ニュースキャスターになった気分



『ロッテ製菓』にて



『梨花女子』で韓国の女子の間で流行っているポーズ！

子大学に行った。梨花大の前で写真を撮ると恋が実るといふ話を聞いていたので、梨花大の前で韓国人の女の子たちの間で流行っているとされるポーズで写真を撮り、学生たちに交じって歩いた。今になって、「あの時、近くにいた学生に韓国語で質問を試みたら良かった。」という後悔が芽生えた。この日の夜は、焼肉を食べて、ホテルへ戻った。

14日(火) [3日目]

- 09:00 ホテル出発
- 10:30 国会議事堂見学
- 13:00 昼食
- 14:30 日本語の授業参観(白石芸術大学日本語学科)
- 16:00 ユニクロ江南店見学
- 17:00 韓国の大学生との交流会
- 22:00 ホテル到着

韓国に来てから3日が経った。徐々に、自然と韓国語が口から飛び出すようになってきた。私たちは、分からない単語があれば、すぐに先生たちに教えてもらった。韓国語を勉強するには、素晴らしい環境だった。この日はまず、『国会議事堂』へ行った。真夏を代表するような暑

い日だった。地下鉄に乗り、少し歩いたところに、一際大きく威圧感のある建物が見えた。韓国の国会議事堂はアジア最大規模だそうだ。ちょうどこの日、小学生の団体が何組か同じように見学をしに来ていたこともあり、議員の席が議長席を包むように扇状に広がるクーラーの効いた本会議場にて韓国語による説明を受けた。議長席の頭上には、韓国の国花であるムクゲの花の中に「國」と書かれた国会のシンボルマークが煌めいていた。私は、集中してわかる単語がないか探った。最も印象に残った話は、韓国と北朝鮮が統一をした時の事を想定して、この議員席が現在は299議席であるが、最大400まで拡張可能になっているという話である。今もなお第二次世界大戦後の傷を負う分断国家であることを伺わせる。だからこそ、国会議事堂を象徴するエメラルドグリーン色のドーム型の屋根は、国民の心を一つに集めるという意味を持っている。ここで、朝鮮半島統一に向けた意志をも主張しているのだろうか、という考えが私の頭を過ぎった。また、質疑応答の時間、大勢の小学生が積極的に手を挙げて発言をしている姿を見て、なるべく目立たず控えめにする日本の学生との違いを感じた。その後、展示物を見て、再び、夏の炎天下の中へ身を投じた。

次は、白石芸術大学で日本語の授業の見学をした。一生懸命他言語を勉強している学生たちの姿は、私たちが韓国語の授業を受けている姿と重なり、親近感を覚えた。

その後、江南で自由時間があったので、『ユニクロ』へ入った。そこで、日本と韓国の文化の違いを感じた。実は、韓国に行く前に日本のユニクロを訪れ、どんな雰囲気かを見ていたのだが、面白い発見があった。広告は、モデルは違うが、日本のものとまったく同様だった。しかし、店内を見渡して見ると何かが違う。色合いだ。色の並べ方が違うため、店全体の雰囲気が変わっていた。また、マネキンの格好がまったく違うのである。色合いもそうなのだが、日本は全体的に無難にまとまっている。柄物を入れるなら、それが映えるものを周りに入れるなど、誰もが受け入れられる服装や色合いが日本の特徴的なファッションなのかもしれない。しかし、韓国のマネキンがまとっていたのは、柄と柄を組み合わせたり、奇抜な色を組み合わせた。どちらが良い悪いではなく、それぞれに国の個性が出ていて面白い。確かに、あまり主張をせず、周りと協調するのが日本なのだろう。

自由時間の後は、日本語学校に通う学生との



『国会議事堂』前にて



説明を受けた本会議場にて



日本語の授業で、韓国語で自己紹介！



日本語学校の学生たちと一緒に

交流会であった。焼肉屋で夕飯を食べながら、日本人は韓国語、韓国人は日本語を使って会話をするという方法を取ったのだが、これが想像以上に面白かった。私たちは、積極的に日本語を使う韓国人の学生らに押されながらも、自分の思いを相手に伝えようと必死に会話をした。特に日本と韓国の恋愛事情の違いについての話に花を咲かせた。この時ふと思った言葉がある。「努力する姿は美しい。」輝かしい笑顔は努力する者の特権なのかもしれない。のちに、私たちは、連絡を取り合うステキな友人となった。

15日(水) [4日目]

- 09:00 ホテル出発
- 10:00 MISSHA(美思) 本社訪問
- 13:00 ソウル大学見学
- 16:00 MISSHA(美思) 明洞店見学
- 17:30 Korea house見学
- 22:00 ホテル到着

4日目の早朝。大急ぎで身支度をし、ご飯をかき込んだ。今日はビッグイベントが2つある。

まずは、『MISSHA』の本社訪問である。普段よりもきちんとした服装に、初日に免税店で買ったMISSHAのBBクリームを肌に馴染ま

せ、集合場所へ足を運んだ。明洞や地下鉄の駅や免税店でよく目にするMISSHAは、今まさに飛躍中の中小企業である。緊張感を持ちながら本社へ向かう。MISSHAへ行くと、日本語の堪能な社員の方が丁寧にMISSHAについて説明をしてくださった。以下がその内容である。

MISSHAは、いつでも顧客とコミュニケーションを取れるような「Beauty net」というインターネットの通販サイトを活用することで、2000年から急速に飛躍してきた化粧品会社である。顧客の目線から商品を考え、顧客との関わりや意見を最も重要なものとしてきた。信頼性を失わない程度に価格を下げ、生活必需品である化粧品と顧客の距離を縮めた。顧客の評価が得られるように、流行や海外の化粧品を研究することにも努めているという。「高価であるほど良い化粧品というわけではない。その中身こそが重要である」これがMISSHAの信念とされ、現在、顧客のためのブランドとして成長し続けている。日本語での説明の後、お忙しい中、副社長が来てくださった。私たちの質問に丁寧に、またユーモアを含ませながら答えてくださったが、残念ながら、通訳なしでは、ハンダグが私の頭上を浮遊しては消えていくかのように、頭に入ってこなかった。顧客だけでは

く社員など、人と人との繋がりを大切にしている、全体的に温かい雰囲気と思いやりを持ったステキな会社だという印象を持った。これから、私たちは言わずもがな、世界中がMISSHAの製品を使うようになる日はそう遠くないかもしれない。

次に私たちは、山間の広大な敷地にある、韓国最高峰の国立大学『ソウル大学』へ向かった。食堂で生徒に混じって食事をした後、ソウル大学の書店や売店などで、現在私の愛読書としてある、韓国人向けの日本語学習書や記念品を買った。

もう一つのビッグイベントは、『Korea house』の見学である。ここは、韓国の伝統文化を守るために建てられた。建物は景福宮の慈慶殿をモデルに重要無形文化財である大木匠によって建てられた伝統家屋であり、威厳と趣が感じられた。そこで、私たちは本格的な朝鮮王朝時代の宮廷料理を食べた。味は割りと薄味で、好みみだった。辛い食べ物もそんなに多くはなかった。陰陽五行の思想から、五味・五色・五法をバランスよく出すというのが良いとされているということ、彩りが良く、また様々な種類の料理が目の前に並んでいた。私が料理を食べている中で最も印象に残ったことは、日本

と韓国の美徳の違いによる戦いである。私たちがゆっくりと目の前に広がるご馳走をつついてみると、チマ・チヨゴリを着た店員の方が、ひよいっとまだ料理の残っている皿を持ち上げ、何も言わずに持って行行った。「え、まだ食べている最中なのに。」私は放心状態となった。気を取り直して、再び食べていると、また店員の方が忙しく動きながら、同じ事を繰り返そうとする。しかし、私はまだそれに手をつけていなかった。食べたい。持って行って貰っては困る。そこで、「まだ食べています。」と韓国語で丁寧言いながら、お皿を元の位置に戻した。

韓国では、客人として招かれた時は、「完食せずに残して、十分な量が振舞われたことを示す」ことが美徳とされてきたため、宮廷料理では普通の作法に則ってもてなしてくれただろう。しかし、私たち日本人は昔から「もったいない精神」を持っているため、このような事が起きてしまったのだが、文化を理解するということがいかに大事なことが分かった。この後も、一生懸命お皿を抱えて食べていたということも言うまでもない。食事の後は、伝統芸能の鑑賞をした。伝統舞踊では、チマ・チヨゴリや唐衣を着た女性が華麗に舞っており、彩りの華やかさや踊りの激しさに目を奪われた。世界



『MISSHA』の方と一緒に



『ソウル大学』の学食で学生さんといつの間に……



『Korea house』前にて



伝統舞踊を披露してくださった方々と一緒に

文化遺産に登録されたパンソリは、歌い手の声の調子が何となく、経を読む時と同じような音の流れをしている気がしたが、語りのような、歌のような、とても独特な芸術性を感じた。伝統楽器を使つての演奏も良かったが、私が最も好きだったのが、太鼓の演奏である。心底に響き渡る太鼓の音が心地よく、また体全体が音に反応して小刻みに動いているのがわかるほど、軽快なリズムを刻んでいた。異なった伝統芸能ではあるが、どことなく日本と似ている気がした。滅多にできる体験ではないので、見学をすることができて良かったと感じた。

16日(木)「5日目」

- 07..50 ホテル出発
- 09..00 板門店見学
- 16..00 ロッテマート見学
- 17..30 韓国の食文化を体験
- 19..30 ソウルタワー見学
- 22..00 ホテル到着

韓国は今、冷戦状態にある。この言葉がこの4日間で1度でも過ぎただろうか……。5日目は『板門店ツアー』に参加した。板門店は韓国と北朝鮮の間に位置する軍事境界線上にあ

る村の名である。私はこの日初めて、韓国の置かれる状況を肌で感じた。非武装地帯内に入る際、軽い服装、指を差す、手を振る、大声で笑う、撮影、撮影時のピースサインなど、普段気にせずに行っている行動が禁止されたため、緊張と不安に襲われた。「もし発砲されたらどうしよう。」今まで陽気に説明して下さっていた女性ガイドの方の声のトーンが急に落ち、表情は真剣そのものだった。そして、非武装地帯内の共同警備区域の警備を行う国連軍の基地「キャンプ・ボンファス」に入るも、アメリカからF16が来ていたことで、ツアーの進行が変わった。軍人の方々の緊張感もこちらに伝わってきて、更に筋肉が強ばり、身動きが取れなくなるようだった。少し予定はずれたが、私たちは、軍事停戦委員会本会議場に入り、そこに設置されたテーブルの上に置かれる境界線の役割を果たすマイクを間近に見ることができた。この場所は唯一境界線を越えることが出来る場所であり、私たちは緊張しながらも境界線を越えた。越えることが躊躇われる数少ない境界線を越えた時は、思わず感慨に浸った。ここからいつの日か、境界線という言葉が取り払われるのだろうか。私たちは静かに、2列で軍人の方の後に続いた。そして、捕虜の交換が行われた「帰ら



軍事境界線では両軍が常に互いを監視している



机上のマイクの右が北朝鮮、左が韓国



韓国料理屋で乾杯！（乾杯！）



韓国の電車の座席は鉄製だった

ざる橋」や「ポプラ事件」の石碑、休戦当時の住人の直系子孫だけ居住することができる「自由の村」をバスから見学し、非武装地帯を抜けた。「板門店」は、まさに冷戦状態にあることを裏付ける場所だった。第二次世界大戦後に負った傷がいかに深く、恐ろしいものだということをまざまざと見せられた。終始緊張状態だった『板門店』内でも、蠟人形の様に直立不動だった軍人の方が無邪気に両手を振って挨拶をしてくださったため、一瞬バス内が和んだ場面もあった。重たい空気の中で、平和を作ることがいかに難しく、いかに大事であるかを考えることができ、貴重な体験ができて本当に良かったと感じた。そして、私たちは昼食に美味しいブルコギを食べ、ロッテマートでたくさんのお買い物をして、ソウルタワーへ足を運び、夜景を楽しんだ。

17日（金）【6日目】

- 09:30 ホテル出発
- 10:00 景福宮・国立博物館見学
- 12:00 仁寺洞見学
- 12:30 昼食
- 15:00 出国手続き
- 16:40 ✈金浦空港出発（KAL2709便）

18…45 羽田空港到着

19…00 入国手続き

19…30 解散

いよいよ最終日となった。5日間歩き通しで、だいぶ足も重たくなってきていたが、最後の力を振り絞って李氏朝鮮の王宮、『景福宮』へ向かった。ここもまた、繰り返しはならない歴史を背負う場所である。そして、そこに深く関わるのが日本である。日本は、文禄の役において景福宮を焼き払い、韓国を日本の統治下に治めた時に景福宮から王宮としての役割を奪い取ったという過去を持つ。国立博物館と共に、ここではたくさん韓国の歴史を学ぶことができた。景福宮は、過去からいかに学ぶかを、人々に考えさせる重要な場所だった。そして、古い町並みを残す『仁寺洞』を散歩し、韓国での素晴らしい体験との別れを惜しみつつ、帰路についた。

学年、学部、学科はまちまち。しかし、同じ「韓国語」という言語を学ぶことで私たちは出会い、こうして共に異文化の中に身を投じ、自らの知識を試し、そして新たな知識を蓄えるという経験をした。それぞれ学び始めた時期は違うが、懸命に韓国という異文化に関わろうとす



『景福宮』前にて



『景福宮・勤政殿』前にて



『景福宮・康寧殿』にて

る姿勢は、どれも輝いていた。この企業見学の体験を私は糧にして、これからの韓国語の学びに生かしていきたいと感じた。今回の企業見学で学んだことは、決して言語だけではない。他文化に直接触れることで日本との違いを感じ、また日本を知った。旅行では行かない場所へ行き、韓国という日本とは異なった文化を持った国について学んだ。また、日本と韓国がいかに深い関わりを持った国であるかを感じた。「この距離を生かして、お互い支え合えるような関係を築けるようなと良いな。」と思った。「韓国語をもっと話せるようになりたい。勉強しなければ。」と思ったことは言うまでもない。学ぶ楽しさを再確認した。良い緊張感と集中力を持って過ごせた6日間の素晴らしい企業見学に関わった全ての人に「ありがとうございました。」と言いたい。